

ニゲラの栽培について

1. はじめに

ニゲラは花型が独特で、しかも開花終了後の子房も素材として用いることができるためアレンジメントフラワーやドライフラワーとしての利用が増えてきている。花色は青または白色であったが、最近では紫色や桃色の品種も育成されてきている。耐寒性は強い。

2. 栽培のポイント

は種：発芽適温は18～20℃である。発芽には10日から、長い場合には2週間を要する。また、代表的な嫌光性種子であるため、覆土は完全に種子が隠れるようになるまで行い、定植時に断根が少ないプラグトレイやペーパーポットを利用する。

育苗：高温期には種し、低温育苗を行えば年内に出荷することが可能である。低温育苗は、発芽適温で10日程度管理して、催芽を確認した後、クーラー室又は山上げで20日から30日間育苗すればよい。

施肥：多肥栽培では、茎が柔らかく水揚げも悪くなるので注意する。元肥の施肥量の目安は1a当たりN、P₂O₅、K₂O、それぞれ成分で1kgである。生育にあわせて600～1000倍程度の液肥を施用する。

定植：高温期に定植した場合、頂芽が原因不明の枯死をしてしまい、主枝が収穫できなくなるので注意が必要である。暖地で品質の良い主枝を収穫するためには、定植時期を9月中旬以降にすることが必要と思われる。

長日処理：ニゲラは長日条件で開花が促進されるため、年内出荷を目標とする場合には、早生種を栽培して、16時間日長になるように電照を行わなければならない。電球の使用割合は10㎡当たり1個程度でよい。

温度管理：暖地のハウス栽培では、促成栽培の場合、最低夜温を10℃に保てば良い。また、早春、高温多湿にすると、花が軟弱になるので、換気に注意する。

水管理：定植後の生育初期以外は、過度のかん水を控え、乾燥気味に管理する。

病害虫防除：病害虫には比較的強いが、病気

では、ちがれ病、灰色かび病、うどんこ病の防除を行う。特に、冬季の換気を行えない時期には、うどんこ病の発生が多くなるので防除に努める。害虫では、アブラムシ、ダニ等の防除を行う。

収穫：主枝は、頂花をとばして花の高さを揃える。高温期に定植した場合は、主枝が止まってしまうので、1株当たり通常L(70cm)が2～3本とS(50cm)が1本程度収穫できる。主枝が止まらず順調に生育した場合は、2L(80cm)が1本と、Sが3～4本収穫できる。

作型：ニゲラは、暖地において11月から露地栽培をした場合には、開花は5月から6月になる。しかし、同じ時期からの栽培であっても、長日処理を行うことにより、開花は促進されて2月から3月になる。また、高温期には種して、クーラー育苗を行い9月に定植した場合の開花期は2月になり、更にこの苗を長日処理した場合の開花期は、10月から12月に促進される。1月播きの施設栽培は年内に採花が終了する花きの後作に導入可能な作型である。

3. おわりに

ニゲラの市場性については現在のところ入荷量が少ないため判断が難しいが、省力的に栽培できる花きであるので複合経営の中の1品目として導入しやすいと思われる。

(園芸部 上山 茂文)

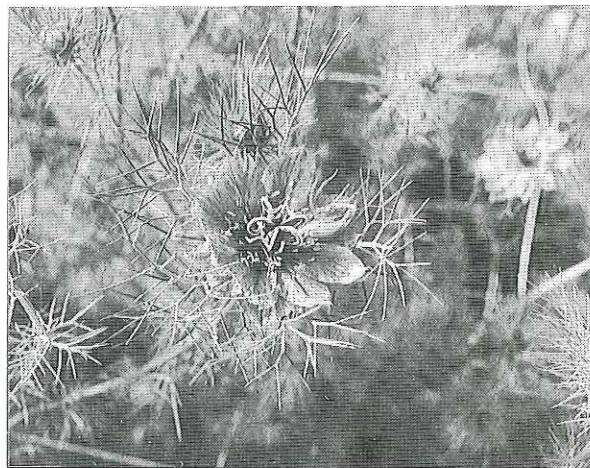


図1 ニゲラの花